

平成 29 年度 信濃町立信濃小中学校 学校評価  
 (自己評価および学校関係者評価)

1 学ぶ意欲が高まる学習環境づくりと学力の向上について

具体的取組	学校自己評価 ○成果・△課題 ⇒今後の方策	学校関係者評価
子どもの学ぶ意欲を高めるための9年間を見通した学習過程のあり方を研究	○9年間のカリキュラム作成のため教科会で検討し、実践を始めた。 △つけるべき力が不明確。 ⇒本校で育成すべき資質・能力を明確にし、9年間のカリキュラムを実証する。	過年度からの課題であった「家庭学習に向かう姿勢が、やや欠けている」という点については、今年度より下校前に家庭学習計画を立てる「スタートタイム」の時間を設け、家庭学習に主体的に取り組む姿勢に改善が見られた。
見とどけの時間の確保、授業のめあてとまとめの提示や、授業の見通しの提示、友との学び合いが生まれるペア・グループ学習を導入	○主体的・探求的な学びのための学習指導へ転換した。各種調査結果が改善した。 △学習内容の定着不足。 ⇒教師の教科指導力を向上し、互いの授業に学び合う機会と内容を更に充実させる。学ぶ意欲を高める指導により、自ら疑問をもち課題解決していく児童生徒を育成する。	また、「9年間を見通したカリキュラム作成」について、昨年度より教科会等で検討し、今年度よりカリキュラムが実践されていることは高く評価できます。
家庭と連携して家庭学習の改善に取り組み、家庭学習スタートタイムを設定	○家庭学習を主体的に取り組む姿勢が見えてきた。プログレスを年2期設定した。 △授業内容と関連付けた家庭学習にしてい く必要がある。 ⇒教科担任と学級担任が連携して、個に応じた指導を更に充実させていく。	引き続き、学校ホームページ・広報しなの・学校行事や来年度以降の学校公開等で、児童生徒の生き生きとした「学びに向かう姿」を地域に発信いただきたい。
朝の活動（朝読書・朝ドリル）を通して、「集中・継続・最後までやり遂げる」の心構えを培う	○毎朝の10分間読書により読書が習慣化した。朝ドリルの実施で、徐々に学習内容が定着してきた。 △個人の読書の量や質に差がある。学習の定着状況に差がある。 ⇒個に応じた丁寧な指導を今後も継続して実施。家庭への協力も呼びかけ連携する。	開校以来の朝の10分間活動は、子供たちが1日の学校生活を落ち着いた気持ちでスタートするために、効果ある取組と判断できます。
年間を通じて読書を大切にし、本に親しみ、本を愛する学校を目指す	○問題解決的な学習でラーニングセンターを積極的に活用できた。司書による資料の提示や豊富な情報提供を行うことができた。 △文章や図表を読み解く力や複数の情報に関係づける力に課題がある。 ⇒「どんな力」を「どのように付けるか」を明確にした授業を実践する。	個人の読書量や質については、個々に応じた目標設定等を工夫して「やる気・興味を引き出す」という観点を取り入れて、家庭とも連携した取組をお願いしたい。

## 2 相手意識を大切にした温かな人間関係づくりと特別支援教育の充実について

具体的取組	学校自己評価 ○成果・△課題 ⇒今後の方策	学校関係者評価
集団不適応のある児童生徒、特別支援学級入級児童生徒等が安心して生活できる集団をつくる	○リソースルームや通級指導教室、特別支援学級でのきめ細やかな支援ができた。多くの教職員によるチームで対応している。 △利用児童生徒が増加傾向にある。 ⇒個々の支援体制構築のため、学級担任が主体性を発揮し職員間の連携をはかる。	開校以来、個々の児童生徒を大切にした取り組みと判断できます。卒業後の進路まで見据えて、夢や目標を持って生きていくことの大切さを指導しています。
友と励まし合い、様々な価値を受け入れ、自他の良さを認め合える集団づくり	○人権教育月間（年2回）を中心として、相手意識のある行動等を考えることができた。 ⇒学校目標の一つ「克己」を具現化する道徳教育を更に充実していく。	義務教育学校でしかできない「縦のつながり」をより一層重視し、「児童生徒同士での学び合い」を通じて、自分の考えを説明したり発表し合う活動等の取組が必要です。
挨拶の心、思いやりの心、感謝の心をいつも意識し、人権感覚を高める	○初等部と高等部が連携した取組（挨拶運動等）で人権感覚を高めることができた。 ⇒学校生活全体を通じて、相手の気持ちを考えた言動や行動を更に広げていく。	各種調査の結果から、自己有用感が低く、将来の夢や目標を持ってない児童生徒がいることがわかりました。その必要性を子どもたちに教育する機会や導きが求められていることを、学校・家庭・地域は切実に受け止めていく必要があります。
5年生から部活動に参加。やり遂げようとする姿を支援	○自分で選んだ活動に打ち込む姿が目立つ。先輩の姿に学びながらやり遂げる経験を積むことができている。 ⇒外部支援を活用し更に魅力ある部活動に。	
水曜日昼休みに集会（音楽集会・児童生徒集会等）や異学年交流を定例化	○全校の児童生徒が共に創り上げる過程で互いの成長を認め合う姿が見えた。虹を架けようプロジェクトにより職員の連携も強化。 ⇒義務教育学校としての特色を更に探る。	

## 3 地域と共に歩む学校（信州型コミュニティスクールの推進）について

具体的取組	学校自己評価 ○成果・△課題 ⇒今後の方策	学校関係者評価
地域を学び、地域で学び、地域に学び、地域と共に学ぶ「ふるさと学習」を推進	○多くの領域について、地域の方の支援により本物にふれる学習を進めることができた。 ⇒地域の題材を、地域の方から学ぶ機会を更に充実させ、地域の方と共に「学び合う」	学校・家庭・地域の三位一体の効果的な学習活動や教材研究が実践されていると判断できます。
職員それぞれがコーディネーター役として動き、情報交換や連絡調整をして、児童生徒の活動がスムーズに行われるようにする	○カリキュラムマネジメントの視点から、各教科をふるさと学習の題材について横断的に位置付けた。課題解決的な学習を推進し、地域との連絡調整を含め、教材研究の充実を図ることができた。 ⇒答えのない問いに対して、主体的・能動的に粘り強く考える力を育成する。	今後も地域全体で学校を「見守る」、「育てる」意識がより広がり定着することを希望します。